

## 高津区おはなしアーカイブ

### ●亀ヶ谷 与四郎 (かめがや よしろう)さん

大正9年生まれ 94歳

川崎市高津区梶ヶ谷在住



#### ◆子供の頃の思い出

亀ヶ谷という家は5、6軒あってね。私は九人兄弟の次男です。このあたりは村田さんと田村さんが多いです。父は尋常小学校を卒業したあと、西福寺にあった高等科で勉強した人でね。昔は高等科まで進学する人は少なかったですし、父からは当時、軍刀を下げて学校へ通ったという話を聞いています。

子供の頃、男の子は「竹」を使ったおもちゃや「紙鉄砲」で遊びました。弾が紙でできたものです。女の子の遊びは「陣取り」でしたね。大きい家や広い庭、西福寺で遊んだこともありました。尋常小学校を卒業すると男の子は東京で小僧として丁稚奉公をしていました。作男になって野菜の作り

方を勉強してね。年季が明けたら家に戻って、家の農作業に役立てるわけです。女の子も女中奉公に行きました。私の頃は県立川崎中学（現・神奈川県立川崎高校）に進んだ親戚の男の子と、高津町立女学校（現・川崎市立高津高校）に進学した女の子2人の、合わせて3人だけが進学組でね。私も宮崎尋常小学校を卒業してから二十歳になるまで、農作業など家の手伝いをしていたわけです。

#### ◆当時の町の風景

今よりも自然が豊かでね。夕方になると蛍が家の中まで入り込んで来るのです。田んぼも多かったですよ。このあたりは昔、51戸あったという記録も残る小さな集落ですが、それぞれ一反から二反、多いところでは四反の田んぼを持つ家もあり、周りは農家ばかりでした。今のJR貨物の駅のあたりも田んぼでね。あそこは盛土をして埋め立てたのですよ。野川から子母口にかけては鶴見川の支流もあって、蛍が住むのには適していたのでしょね。6月ごろになると2センチくらいのマツムシが「ジージー」って低く鳴いてね。普通の蟬より早く鳴くし、じりじりした鳴き声が「暑苦しいねえ」って言われてね。でもマツムシの鳴き声が梅雨入りの合図のようなもので、入梅直前に鳴いていたのは懐かしいね。梅雨が明けるとアブラゼミが鳴き、秋が来ると今度は蝸（ヒグラシ）でね。

山も多かったから雑木林を伐採して燃料や炭にしたり、畑ではネギや白菜がたくさん取れたり、茄子やきゅうり、ヤツガシラ、さつまいも、ほうれん草もあったから、皆、自給自足の生活ができていたね。落ち葉を堆肥にしたり、苗床を促成栽培したりしてね。中でも梶ヶ谷ではネギを作っている人が多かったから、梶ヶ谷だけで品評会が開けるくらい盛んだったね。梶ヶ谷幼稚園のシンボルマークは今でもネギがデザインされているのはそういう理由からでね。あの頃は耕作用の馬や牛を飼う家も多くて、チャボや鶏もたくさんいたね。

#### ◆戦中戦後の記憶

二十歳の時に召集令状が来てね。最初は第一補充兵、その後、第二補充兵として二回召集されてね。甲府の六十二部隊に配属になって、補充兵だから何でもしましたよ。朝、ラッパが鳴ると点呼があって、一日が始まるのだけれど、嫌だからって脱走したら殺されるから、辛抱するしかなかったね。最初の大変な3ヶ月が過ぎるとだんだん軍隊にも慣れていったけどね。一回目の兵役から帰ったあとは溝口の日本光学にある軍需工場で2年半ほど働いてね。二度目の兵役の時には大陸に渡って黄河にかかる橋を守る役目だったけれど、毎日のように敵の飛行機が爆撃を繰り返してくるから大変でね。時には野営もしたね。負け戦になるっ

てわかっていたけど、そんなこと言えないからね。

終戦は上海にいる時だったね。半年間は捕虜として収容所に入れられて、昭和21年4月に復員してきたんだ。引き揚げで船が舞鶴港に着くと東海道を川崎へ向かって汽車に乗り、たった一人で家に帰り着いてね。家族がとても喜んでお祝いに近所へ金平糖を配ってくれたことがあったね。戦後の農地解放ではこのあたりの土地の持ち主が変わったりもしたけれど、私は結婚して分家として独立してね。畑を支給されたのでしばらくは自作農を続けていたのだけれど、農家というのは畑に種を撒いても収穫してお金に替えられるまでには半年はかかるからね。経験がないとなかなかうまくできないしね。難しいね。

みんなで今の「いこいの家」のところに「倶楽部」というのを作ってね。いわゆる農作物の集荷場だね。ネギやさつまいもなど収穫した野菜をトラックに積んで東京へ出荷して生活していた時代だったね。ちょうど車が普及し始めたころで、最初はオート三輪だったけど、やがてトラックになって、地主の家が相続税対策としてその土地を手放すまで「倶楽部」は続いたわけですよ。

#### ◆ブルがやってきた

高度経済成長の時代になって昭和44年にこのあたりの区画整理が始まってね。そ

の少し前に東急が溝の口から長津田まで伸びて梶が谷駅もできたのですよ。田園都市線ができて、のどかだったこのあたりにも否応なしに近代化の波が押し寄せてきて、沼地だった低い土地が埋め立てられて JR の貨物駅になったりしてね。そう、駅ができて東急の区画整理が始まったら「ブル」がやってきたんだ。ブルドーザーのことだよ。「ブル」が田んぼや畑を次々と壊して、宅地や道を作っていったからね。もうそうになったら、とても農業どころではないね。精魂込めて手入れした畑だって「ブル」のせいで石ころがいっぱいで、とても作物なんか作れる状態じゃなかった。うちもその時、これ以上農業を続けることは無理だと観念したね。時代の流れとはいえ、あの時は寂しかったね。

#### ◆民間信仰

亀ヶ谷の家に代々伝わるお地蔵さまの話を父や祖父からいろいろ聞いていますよ。お地蔵さんの隣には馬頭観世音も並んでいるんだ。そのお地蔵さまは昔、修業中にこのあたりを通りかかった野川のお坊さんが病気になって「私に万一のことがあった時は亀ヶ谷さんに伝えてほしい」と言い残して亡くなって、うちの先祖が今の梶が谷五丁目の十字路のあたりに建てて供養してあげたと聞いています。それを区画整理の時に今の場所に移すことになって、掘り起こして調査したら「骨が入っておりました」

と言っていたから、本当だったという話になってね。またはお坊さんじゃなくて病気の女の人、という説もあってね。「私が死んだらこれまでお世話になったお礼がしたい」と言って、亡くなったあと埋葬した上にお地蔵さまを立てて守り本尊にしたという言い伝えでね。やがて「子宝に恵まれる」と言われるようになって、今も手を合わせる人の姿がありますね。他にも亀ヶ谷の家には季節になると「廻り地蔵」や「お不動様」がまわって来ましたね。



<お地蔵さま・亀ヶ谷家敷地内>

#### ◆廻り地蔵とお不動様

亀ヶ谷の本家には「廻り地蔵」と「お不動様」という、それぞれの仏様が毎年一泊ずつお泊まりになる行事があるのです。

「廻り地蔵」は末長にある増福寺に祀られているお地蔵さまの巡業で、善福寺を出発して梶が谷（亀ヶ谷家）に一泊して、翌日には有馬の井上家に届けることになっていましたね。今年は2月23日から24日にかけての一泊を亀ヶ谷家にお泊りになりました。お地蔵さまは木像で、台やローソク、

カネ、食器等が全て揃っていて、いつも畳の部屋にお泊りいただいてね。お地蔵さまがいらっしゃると一尺の竹の棒にのぼり旗を立てて、今いらしている、ということをして近所に知らせるわけですよ。そうすると近所の人も代わる代わるお参りされてね。昔はお地蔵さまの一式をリヤカーで運んだけれど、今は車ですね。有馬から増福寺に戻る時には「送り込みの日」といって、また皆で集まるわけです。

一方、「お不動様」の方は5月中旬で、木の箱に入ったお不動様が単体でお見えになりますね。やはり畳の部屋に一泊していただくのです。こちらの方は神木の等覚院のお不動様で、明津を出発して梶ヶ谷（亀ヶ谷家）に来ていただき、そのあとは馬絹の数件を廻って、また等覚院にお戻りになるというものです。最終日にはお泊めした家の皆が集まって、やはり「送り込みの日」をすることになっています。

そのあたりの民間信仰が珍しいということで、平成12年に川崎市市民ミュージアムが東洋大学の太田建彦教授を団長とする調査団を派遣してくれましてね。それによるとお地蔵さまに「建武三年」という年号が刻まれていたことから、鎌倉の源氏の落ち武者がこのあたりにもいたらしい、とか、いろんな話をしていましたね。

## ◆梶ヶ谷の今昔

昔の記録では梶ヶ谷には51軒の家があったということだけれど、区画整理のあと本当に増えましたね。昔から「講中（こうじゅう）」のつきあいがあって、お地蔵さまの信仰などで集まる機会も多かったのも、皆農家だから、何か大事なことを話し合ったり、いろいろ決めたり、助け合いながら隣近所のつきあいを大事にしてきたわけですね。宮前区になってしまった金山地域や宮前区の梶ヶ谷地区とも、今も町内会を通してきめ細かいお付き合いが続いているのは本当にいいことだと思うね。

（平成26年7月20日実施）